

体験型学習による教育方法の改善を目指して（第1報） —一般教育教養科目「あすなろう体験」授業の検証—

桑原 雅臣¹・櫻井 琴音²
鍋島恵美子³・平田 孝治⁴

(¹食物栄養学科・²幼児保育学科・³生活福祉学科・⁴くらし環境学科)

(平成20年2月29日受理)

Verification of the Experiential Learning Subject "Asunarou Taiken" (The First Report)

Masaomi KUWAHARA¹, Kotone SAKURAI²,
Emiko NABESHIMA³ and Koji HIRATA⁴

(*Saga Junior College*)

(Accepted February 29, 2008)

Abstract

Asunarou Taiken is a new liberal arts subject with a lot of educational content that the students learn through various experiences outside the school chiefly. The purpose of this subject is to acquire the excellent communications skills in the society by option program mainly composed of the activity at corporate internship and early exposure. In this report, the summary examination as the guidance teacher is done based on the result of students' attitude surveys to study. As the result of this examination, the interesting improvement plan and information to examine an effective guidance method for students who have various characters, was obtained.

Key words : Asunarou あすなろう
Liberal arts subject 教養科目
Human Education 人間教育
Experiential learning 体験型学習
Educational reform 授業改善

1. 結 言

1. 1 “あすなろう体験”授業開設の背景

人間教育を本学の特色ある教養教育の柱として先行開講された一般教育科目「あすなろう（講義2単位・必修／H15年度新設）」の実体験版授業として、教育の場を学外での社会活動を含めた広い環境の中に設定することによって、人と人とのコミュニケーションの大切さについて肌身を以って体験的に学習することを目的に、平成16年度から教養科目分野に任意選択教科として「あすなろう体験」（演習2単位）が新設された。（資料－1「オリエンテーション資料」）開設された当該科目は、本学の目指す人間教育をさらに推進、活性化するための先進的カリキュラム改革活動の一環として、本学の建学精神（あすなろ（翌檜）：明日はヒノキになる）を色濃く反映した“心の教育”を強力に支える特色ある授業である。

1. 2 授業内容の概要

この授業は、1年次通年配当の演習・2単位カリキュラムである。展開される履修プログラム（表－1「学習の内容」）は、社会のいろいろな分野の人々との直接の触れ合いと個人の実体験を考慮して準備された複数のユニット・オプション（表－2「オプション履修制の内容」）に対し、受講者はその中から任意に約60時間に見合う適宜数のユニット活動を選択することにより自主的なグルー

プ活動を行なう。また、得られる成果をさらに補強するための事前実習指導（体験先の情報収集や対人予備知識の学習など）や体験後のグループ・ディスカッションなどを通して、多様な人間性に対する理解と共に他者と柔軟に関わり合うための社会性をブレ社会人としての視点から涵養することを内容としたサブ・カリキュラムも設定されている。特に、本学各学科の主幹資格となっている栄養士や介護福祉士や保育士および各種教員免許など現場の第一線で専門職に携わるためには、それぞれの分野の専門知識や技術以外に、先ず相手の人間性を深く理解することにより互いの立場と人格を認め合い、弾力的なコミュニケーションが取れる社会能力が必要とされている。「あすなろう体験」授業では、座学主体の知識の修得を行なう以前に、まず狭い教室を飛び出して多種多様な人々で構成されている社会現場の中での自己の再認識と啓発および他人の意見の聴取やその行動の観察などを実体験することにより、人の心の多様性を実感として理解し、それを十分認知した上で物事に対処する訓練（トレーニング）を受けることができることを目指している。更に、各自による当該研修対象に対する事前の予備調査や研究活動等を実施すると共に、研修後のレポート等を基にしたグループ・プレゼンテーションを行なうことにより、自分を含めた各体験参加者の感じた事や意見の相互交換の場を通して他者意識に対する再確認も行なう。

表－1 「あすなろう体験」授業の学習内容

No.	学 習 形 態	教 育 の 目 的
1	体験を行なう「まえ」と「あと」における学内指導を徹底し、実習・研修・見学・体験などの事前調査研究活動と体験前後での学生の多面的意識の変化をきちんと確認学習させる。 （※学生の学習への事前および事後に対するフォロー教育を重視した学習）	① ただ単に体験をさせるだけではなく、今から臨む体験に対する予備知識の学習と事前意識に対する自己確認をさせる。 ② また、体験を終えた時点での事後認識に対する自己点検とその意識の変化についての明確な指導を行なう。
2	学外での実習を主体とする体験学習	教育環境を学校の場に限定せず、多様な外社会の厳しい空気とそこで活動している人々に触れさせる。
3	職業意識と就労意識への動機付け学習	各学科の学生が将来就業を予定している専門職域（又は一般職を含む）に対するインセンティブと現実的視点での意識付けを行ない、進路選択と職業の適正指導の指針とする。
4	グループ体験を通じた自己意識の差異についての確認学習	複数人による同一現場における学外体験学習を通して、自己の認識と第三者（他人）認識の意識の同一性やその差異などについて確認させる。（体験後のグループ・ディスカッションを通しての意見交換）
5	高齢者との触れ合いを通じた知識習得と人間教育（心の教育） （※主に、エルダーカレッジとの共催学習）	地域の「知恵袋」であるお年寄りと接し交流することによって、伝統や礼儀、敬いなどいろいろな豊かな心を学ぶことができる。また、お年寄りの方々も、長い人生で培ったものを若者達に伝えることは強い生きがいを持つことにつながるものと想定できる。旧来の社会では、高齢者と子供・青年達との触れ合いは日常的に行なわれていたが、核家族化で孤立しがちな青年期の心教育環境を変えるためには、老若共生が一番有効であると考えられる。地域の人々が「たて」「よこ」「ななめ」で連携して、地域社会を支えていくことの大切さを体得する。
6	豊かな自然を直に肌で感じ、歴史的史跡や博物・美術館等を実際にツアーして回ることによる共感学習	自然の素晴らしさや多様な文化及び美意識などについて、専門引率者の指導により実感させることにより、新たな共感と豊かな心を養う。
7	各種施設等や各地の行事・催し物などに自主参加（自由参加・奉仕活動・ボランティア活動）することによる体験学習	社会の中のいろいろな活動全般にわたって、無償の行為として積極的に参加又は関わることによって養われる社会性や協調性を体得させる。

表ー２ 「あすなろう体験」授業のオプション設定内容

No.	ユニット・オプション の 名 称	オ プ シ ョ ン の 特 徴	履 修 内 容 の 概 要
1	企業探訪オプション	① 一般の企業・団体・組織などへの中程度期間の就業体験を主体とした学習プログラム。 ② 当該実習に対する事前及び事後における調査活動および結果に対する考察研究を伴った学習。 ③ 主に、企業インターンシップ制度を利用した学外体験を基盤とした活動。	① 主に夏休み期間を利用した在住または帰省地での企業・各種団体組織などでの短期就業体験学習。 ② 研修期間として、1～2週間程度を目安とする。 ③ 受け入れ企業等については、学校側で事前の交渉等を含め準備体制を整えた後、学生に斡旋リストを提示し指導する。 ④ 学生自身が独自に受け入れ企業等を選定又は依頼して自主研修を行なう場合もある。（特に県外地） ⑤ 体験研修が終了した後に、各自にレポートを作成させると同時に、それを基にしたプレゼンテーション会を開催し、参加者全員がどのような意識を持ったかなどについて意見を交わす。 ⑥ インターンシップ保険等への加入を検討。 ⑦ 受け入れ側企業等との組織情報守秘義務に関する契約等の取り交わしが必要となる場合がある。
2	職場探訪オプション	① 将来の専門資格に関連した職場の早期・短期体験とその事前および事後における自己考察に関する研究を主体とした学習プログラム。 ② 各学科の主幹国家資格に関する専門知識や技術の修得による既成概念生成前における“無垢な気持ちでの現場体験”から得られる進路意識の確認学習。 ③ アーリエクスポート研修を基盤とする活動。	① 入学直後の5～7月頃を目安として、各学科本来の学外実習施設への1～2日プレ体験を実施する。 ② 当該実習施設内容に関する学生自身による事前調査に加え、その指導を行なう。 ③ 体験終了後に各自にレポートを作成させると同時に、それを基にしたプレゼンテーション会を開催し、参加した他の者がどのような意見を持っているのかについて自己考察を行なう。
3	人間探訪オプション	① 様々な社会と幅広い年齢層の人々との結び付きから生まれる各種対人コミュニケーションの手法や豊富な知識の獲得を主体とした学習プログラム。 ② 体験活動の事前および事後における研修対象への考察研究を伴った学習プログラム。	① 本学エルダーカレッジとの連携カリキュラムによる協同授業を中核とする。 ② エルダー生と共にいくつかの共通テーマを設定し、主にディスカッション形式の授業を行なうことにより、多面的な思考法や視点を修得する。 ③ エルダー生を特別講師とした授業を開催し、長い人生の間に蓄積された知識（生活の知恵や専門知識）や経験談などを開陳していただき、今後の生き方についての糧とする。
4	自然探訪オプション	① 佐賀県内及び近県地の自然散策を通して、生態と地球環境の現状を直視することにより自然の大切さと保護活動などへの考察を行なうことを主体とした学習プログラム。 ② 体験の事前・事後における対象への資料調査研究と考察研究活動を伴った学習プログラム。	① 専門知識を有した引率者による自然環境をテーマにした日帰り程度の小ツアーを組み実施する。 ② 終了後、各自にレポートを作成させ、それを基にした小発表会を開催し、各テーマ毎に参加者間での活発な討論を行なう。
5	歴史探訪オプション	① 佐賀県内および近県地に所在する各種歴史資料館等の観覧や史跡の実地見学を通して、長い歴史の中での先人達の考えや行動などに対する考察と検証を行なうことを主体とした学習プログラム。 ② 鑑賞、見学等の事前と事後における対象への資料調査研究と考察研究活動を伴った学習プログラム。	① 当該分野での専門知識を有した引率者による学外施設の観覧や見学を目的とした日帰り程度の小ツアーを組み実施する。 ② 終了後、各自にレポートを作成させ、それを基にした小発表会を開催し、各テーマ毎に参加者間での活発な討論を行なう。
6	美の探訪オプション	① 美術館や博物館および各種伝統工芸制作などの現場の見学や実地体験を主体とした学習プログラム。 ② 鑑賞や体験などの事前・事後における対象への資料調査研究と考察研究活動を伴った学習プログラム。	① 当該分野での専門知識を有した引率者による学外施設における鑑賞・観覧を目的とした日帰り程度の小ツアーを組み実施する。 ② 美術工芸作品等の制作現場を訪れ、講師による講義の後、実際の模擬製作を体験する。 ③ 終了後、各自にレポートを作成させ、それを基にした小発表会を開催し、各テーマ毎に意見交換と討論を行なう。
7	コミュニティ探訪オプション	① 各種イベントや行事などに積極的に参加（自由またはボランティア）することによって生じる新たな人間交流とそこから得られる協調性の獲得を主体とした学習プログラム。 ② 当該イベント等に参加する前と事後に生じる意識の差異と団体活動における個の在り方などについての考察活動を含む学習プログラム。	① 佐賀県内および近県地で実施される予定の催し物リストを作成し、参加希望の学生に提示する。 ② 参加希望者は、当該リストを基に、各自で主催団体等と参加交渉と登録手続きを行なう。 ③ 参加確定後、本学にその旨を連絡し、各自が考案した企画書を提出する。 ④ 夏・春等の休業期間中における帰省地での当該参加活動については、事後における報告も可とする。 ⑤ 参加後は、参加証明書等と感想レポートを提出し、それを基にした参加者による報告会を開催する。

1. 3 具体的な活動内容と学習効果

健康福祉・生涯学習センター（本学併設の中高齢者リカレント教育施設）と連携した老若合同授業、企業インターンシップ研修、アーリエクスポート（早期の専門職体験）、各種の地域イベント等への参画、各地域の自然や歴史その他文化施設等への見学ツアーなど多岐にわたっており、1年次の前・後期を通して各自が自主的なグループ活動を行なっている。また、この実活動スケジュールと併せて、学外研修先に対する電話による事前連絡や実習計画立案のための事前打合せと挨拶訪問なども、各々の学生達が担当教員の指導の下、主体的に行なうことにより対外交渉術の一端も経験することができる。さらに、これらの研修が終了した後の体験総括学習の一環としての実習記録日誌や感想レポート執筆のための原稿整理作業および体験から各自が感じ取ったことなどを基調題目としたグループ・セッションや合同プレゼンテーションなどを学内事後教育の中で行なったことにより、学生達は自分を含めた他の体験参加者の感じ取り方に対する異同を相互に意見交換する場を通して自己意識に対する再確認を行なうなど、幅広い視野に立った人間教育を推進することができたと考えている。

特に企業インターンシップ研修の成果として、多くの体験学生達が、他人と自己という本来異質の世界を自然に融和して健全な対人関係を結ぶことの大切さを肌身で感じる事ができたことは貴重な成果であり、人間としての大きな成長にも結び付いたと考えている。昨今、“こころの教育”が叫ばれて久しいが、人と人との心の繋がりとは、理屈（頭だけでの理解）のみで修得できるものではないと思われる。この観点からも、当該授業では自己以外の他者が共に共有している環境の中で物事をどのように考えているのかを的確に知り、実際の集団組織（社会現場）の中で、お互いが柔軟にコミュニケーションを図り、共生して行くための生活の術（生きる力）を学び取ることもできたと考えている。受講した学生達が、貴重な体験学習から得た社会的初心と視点をいつまでも深く心に刻み込み、常に前向きに人生の荒海に果敢に挑戦し、豊かな人生を切り拓いて行くことを願っている。

2. “あすなろう体験”授業の検証

当該授業開設以来4年目を試行錯誤の中に迎えた今般、この第1報においては、先ず当該新設科目を概観的に総括する目的で、受講を終えた学生および現在受講を考えている学生達の意向と我々教員の思いの接点を検証する目的でアンケートによる全学意識調査（資料-2（アンケート票の質問項目と選択肢）、平成19年7月各学科学級毎実施、回収率：100%）を実施した。今回この結果についての考察を行ない、全般的な現状把握をした上で、今後のカリキュラム改善への実働努力とより効果のある

学習方法の模索を行なうために、設定している必修及び任意選択各オプションの個々に対しての詳細な検討を以後発表予定の続報の中で加えて行き、より斬新な授業の展開に繋げて行きたいと考えている。

2. 1 授業全般に対する結果と考察

アンケートは、昨年度（H18）当該体験授業を履修完了した学生用（現2年次生）と今年度（H19）現在履修している学生用（現1年次生）および履修希望しなかった学生用（現1年・2年次生）の3形態の質問票で実施した。集計結果のグラフの中、主要なものを図-1～11に示す。

2. 1. 1 選択履修した学生について

- ① 所属学科毎の履修状況については、年度により多少の変動は見られるが、概ね各学科の定員規模に比例した受講希望が得られている。年度による増減は、学生に対するオリエンテーション時の説明効果による差も大きいように感じる。（図-1参照）

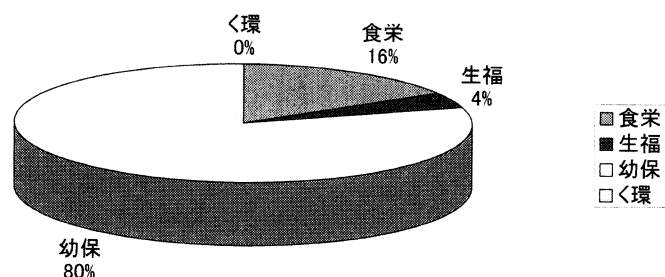
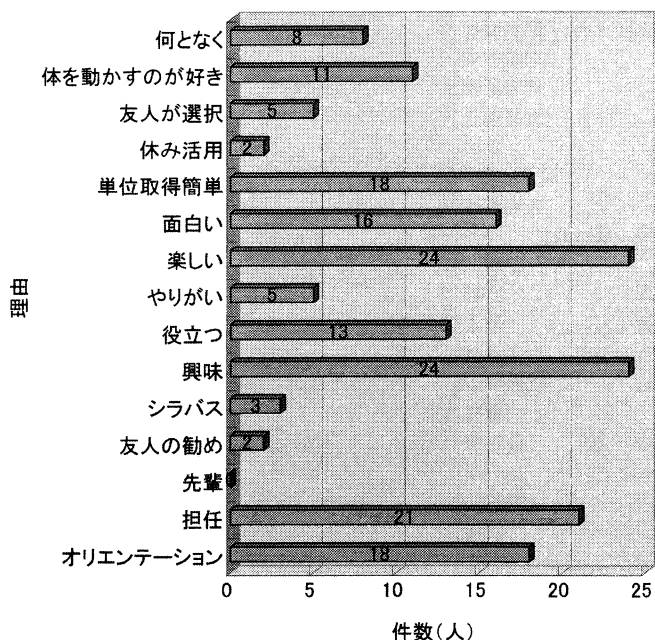
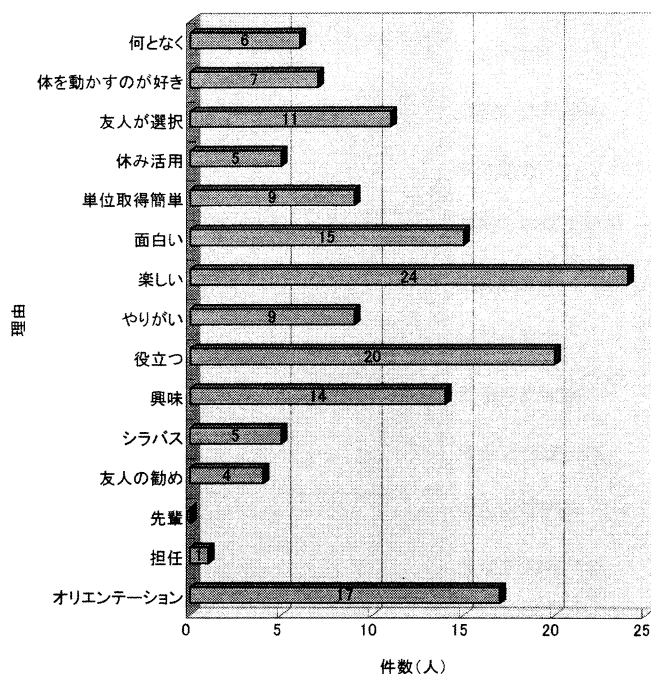


図-1 2006年度あすなろう体験授業受講学生の所属学科（Q-201/現2年生）

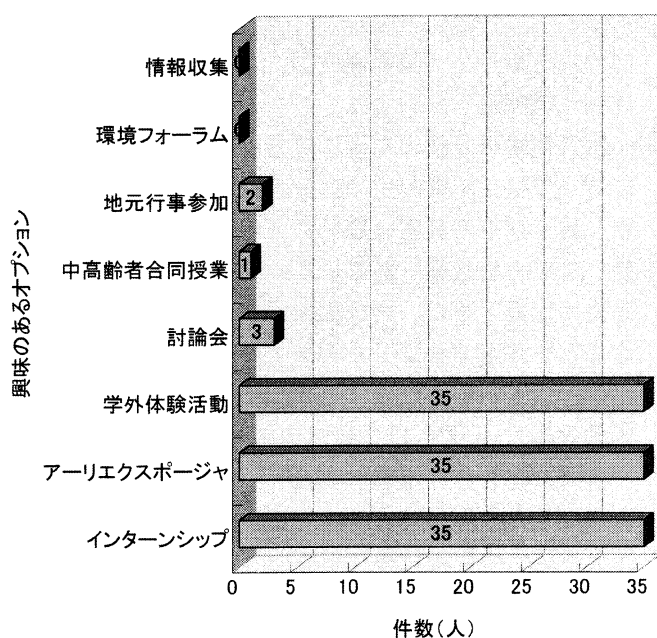
- ② 当該授業を履修することにした理由について複数選択回答可の形式で質問した。最多理由は、授業の内容が“楽しそう”、“面白そう”、“役に立ちそう”、“興味がある”などの実利的かつ授業の魅力に引かれた事であり、また“オリエンテーション”での説明の結果で判断したという事も結果として出ている。昨年度生（現2年次生）と今年度生（現1年次生）による選択のきっかけに対する大きな差異は、“担任”教員による当該教科についての説明と受講の勧めによる効果のようだ。（図-2、図-3参照）
- ③ 授業の中で興味のあった選択オプション（あるいはありそうなもの）は、圧倒的に学外での体験活動（企業インターンシップとアーリエクスポートおよび各種の学外活動）である。屋内における諸活動（討論会、中高齢者（エルダー生）合同授業、各種フォーラム、情報収集活動）を当該授業履修の目的とは意識していない状況と考えて良いようである。（図-4、図-5参照）



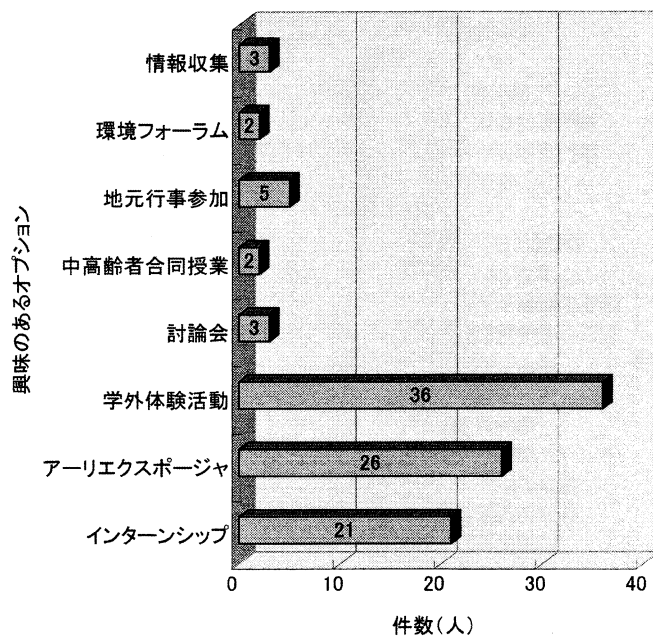
図－2 2006年度あすなろう体験授業受講学生の履修理由
(Q-203／複数回答／現2年生)



図－3 2007年度あすなろう体験授業受講学生の履修した理由
(Q-103／複数回答／現1年生)



図－4 2006年度あすなろう体験授業受講学生の興味
(Q-204／複数回答／現2年生)

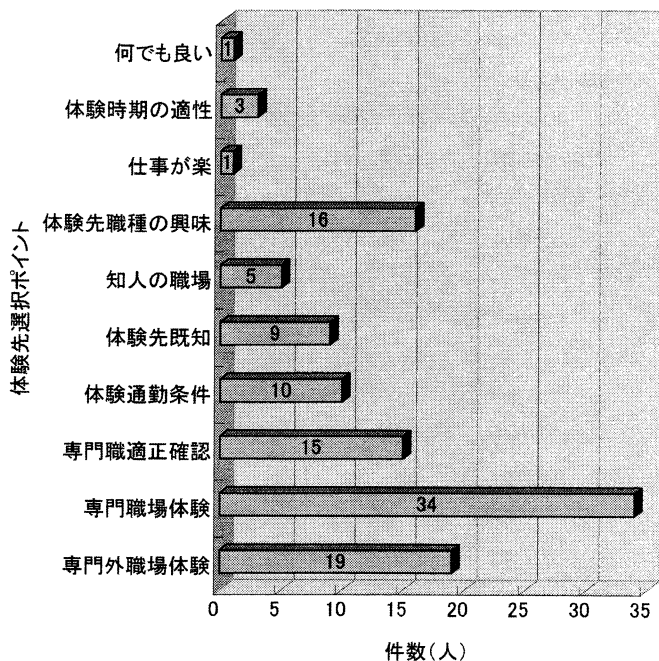


図－5 2007年度あすなろう体験授業受講学生の興味
(Q-104／複数回答／現1年生)

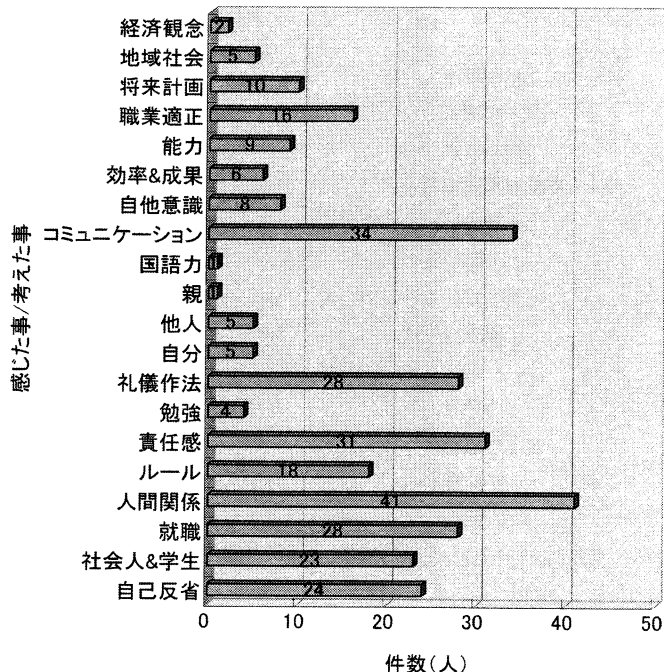
- ④ 企業インターンシップおよびアーリエクスポートの選択ポイント（昨年度受講生（現2年次生））は、圧倒的に将来自分が就くことになる予定の“専門職（資格）職場での体験”であった。これに続くポイントは、学生である今しか体験できない可能性が高い“専門外の職場”を逆に見てみたい、体験しておきたいという目的の学生もいるということであり、また、自分の目指す将来の専門職が果たして本当に適しているのか否かの見極め目的や純粋に“興味を感じる職場

（職種）”体験を望んでいる学生も多くいるようである。その点、無目的な選択、体験時期や仕事の苦楽などを基準に考えている学生は僅少であった。ただ、履修学年が1年生のために未だ自動車などの運転免許を保有していない学生が多く、体験通勤手段の関係から適地を選ぶ事に苦慮している状況はあるようである。（図－6 参照）

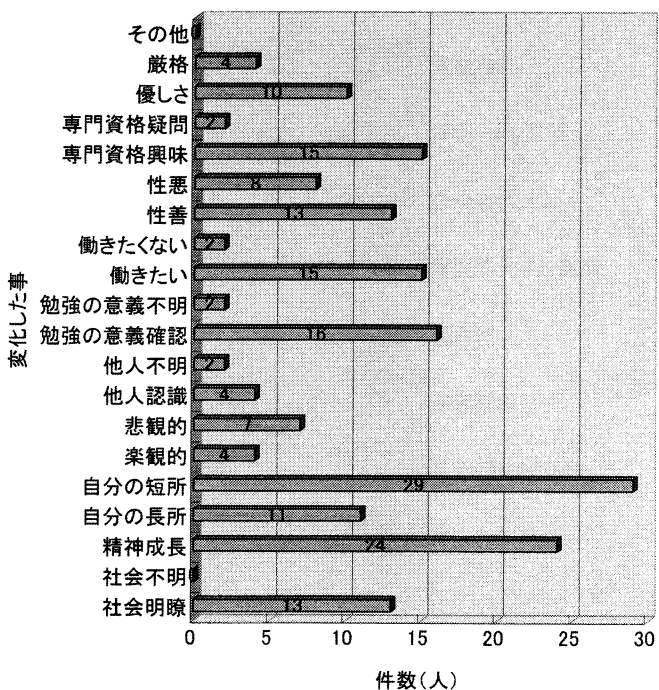
- ⑤ 学外体験後に個々人が感じたことや考えたことに対して一番多かった意見は、“人間関係”を筆頭に“コ



図－6 2006年度あすなろう体験授業受講学生の体験先選択ポイント
(Q-205/複数回答/現2年生)



図－7 2006年度あすなろう体験授業受講学生の体験から感じた事/考えた事
(Q-206/複数回答/現2年生)



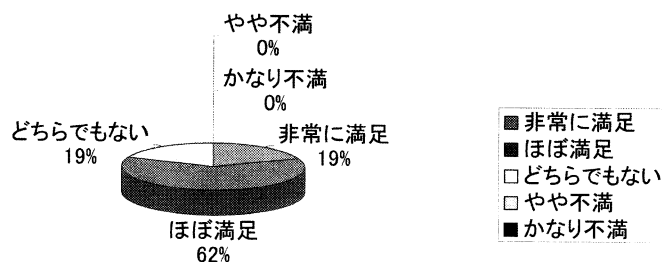
図－8 2006年度あすなろう体験授業受講学生の体験後変化した内容
(Q-207/複数回答/現2年生)

コミュニケーション”、“責任感”、“礼儀作法”などの社会組織の構成と運営の要である「人と人の相互関係」づくりの重要性和反面その難しさを痛感した者が多かった。次に並ぶ項目としては、“自己反省”が多く、学生達の意見としても“テキパキと行動する社会人と比較して、自分たち学生の甘さ”を痛感したとの反省の弁が多く発せられた。以下、“就労感”、“社

会のルール”、“職業適性”、“将来計画”と続く。
(図－7 参照)

⑥ 学外体験等を終えた後に自分が内面的に変化した事に対しては、圧倒的に“自分の短所に対する強烈的な自覚”およびその反省に基付くと考えられる“精神的成長”に対する自覚である。この内面的な人間としての成長の獲得こそが、当該体験授業の重要な目的であったことを考慮すれば、まずまずの成功であるように感じる。以下、短大での“勉強の意義再認識”、“就労意識高揚”、現在の“専門資格等への興味増大”、“人間の優しさや性善の認識”、“社会への明瞭性向上”などと学生自身の多面的な内面のプラス指向性の向上が見て取れる結果が出ている。(図－8 参照)

⑦ 当該体験学習科目履修を修了した時点での満足度に対しては、約80%強(非常に満足/ほぼ満足)の学生達が“受講して良かった”と回答している。(図－9 参照)



図－9 2006年度あすなろう体験授業受講学生の満足度
(Q-208/現2年生)

⑧ 最後に受講学生自身の体験状況に対する評価としては、約80%弱の学生達がこれら学外活動に対しては“自分としても真剣に臨んだ”と答えている。特に企業インターンシップ（アーリエクスポート含む）などの受け入れ企業・団体・各種組織の窓口や実習指導担当および職場の方々の熱心な対応や世話を受ける過程で社会人としての責任感および厳しさと優しさなどの人間性に強く感化され、決して“不真面目”な姿勢（3%以下）など取れるはずもなく、自然な成り行きとして一生懸命に全力投球する結果に繋がったものと考ええる。（図-10参照）

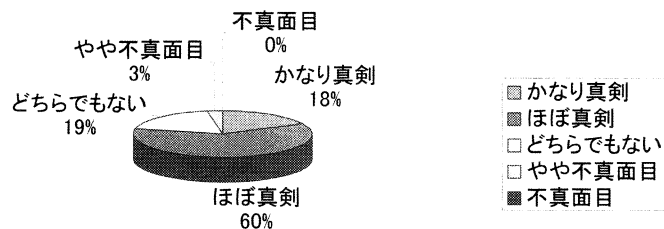


図-10 2006年度あすなろう体験授業受講学生の自己判定
（Q-209／複数回答／現2年生）

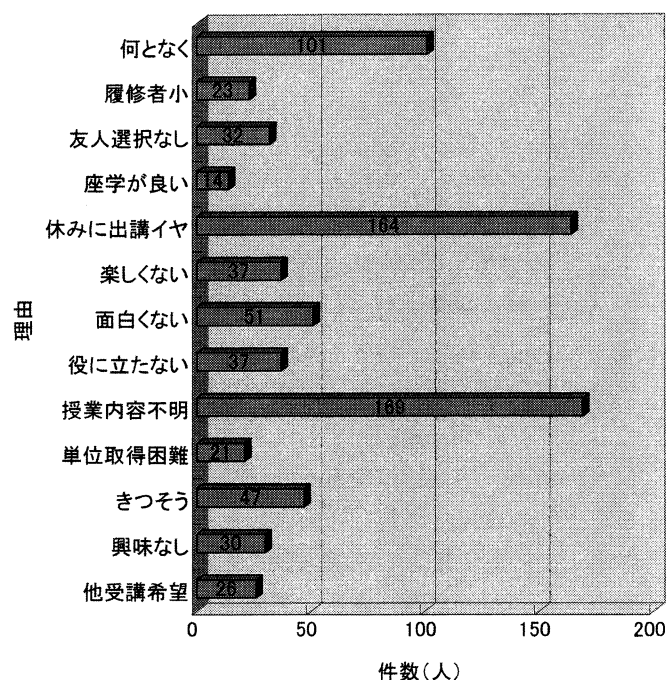


図-11 2006年度あすなろう体験授業非受講学生の選択しなかった理由
（Q-004／複数回答／現1・2年生）

2. 1. 2 当該学外体験授業を選択しなかった学生の意向

- ① 一般教育教養科目群については、卒業必修単位が8単位以上（必修と選択必修含む）となっており、任意な組み合わせ次第では他科目で最低単位を十分クリアすることになり、当該科目の履修希望の是非に対して特段強い意思が働いているとは思っていない。それよりも、入学時に実施される各学科履修オリエンテーション時の指導の結果による影響が大きいように考えられる。
- ② 今回の学生意識調査の中で、特に重要な因子と考えられる“当該学外体験型授業を、なぜ履修しようと思わなかったのか？”についての結果分析である。非希望の圧倒的理由としては、“授業内容が不明だったから”と“夏期休暇中や春期休暇中および土・日・祭日などの休みには授業に来たくない”の2項目であった。（図-11参照）この授業がどのような内容のものであるかが判らないから受講登録しようにも希望することができなかった、という事は完全に履修オリエンテーションが不備であった結果と担当教員達の指導不足と言っても過言ではないような気がする。ただし、この点に関しては異論もあるだろう。それは、入学後の全体オリエンテーション・プログラムの中で、当該あすなろう系授業に対しては別途資料などを基に担当者等が相当に詳細な授業計画とカリキュラムの説明を実施している。さらに、その後の学科ごとおよびクラスごと履修説明と再オリエンテーションを強力に行なって

いるはずである。では、この学生達の意見は何を意味しているのだろうか。我々教員側として、“～であるはず”という事実認識とその結果に伴う自己満足の所産であるのか？果たして、教員の説明の仕方が適当ではなく、非常に理解し難かったからか？教員の説明に説得力が無く、意識に残らなかったからなのか？

それとも、学生達の理解力不足なのか、説明を良く聴いていないからなのか。この結果については、今後もより十分な検証を求めていく必要があるように思われる。我々としては、良くも悪くも出てきた結果すべてが事実であると考え。学生達の理解能力が低下傾向にある事、だからこそもっと学生達にも分かり易く、平易な説明を工夫する必要がある、さらに多くの履修科目群に対する羅列的な説明の中で、記憶に残り彼らの興味を引く方法を考案する努力を教員側が惜しまない必要があるのではないかと反省させられる。このような反省を踏まえた一つの方法として、前年度実際に当該授業を履修し、特に企業インターンシップやアーリエクスポートを体験した2年次学生の体験談報告発表を兼ねた形式で先輩対後輩の環境下でのオリエンテーションを行なう事が履修希望者を増加させる効果を生む可能性があるように思っている。各学科担当者チームによる今後の更なる検討を期待したい。次の理由として多くの学生達が表明している、“休みには授業には出て来たく無い”というものがある。これは、大変厄介な理由である。何となく、理解できる理由のような気もするからである。彼らにも、休み中にはい

ろいろな個人的事情があり、計画事や楽しい事、別にやりたい事などがあるのは当然であろうと思われる。だからこそ、それらに対抗するだけの非常に魅力ある学習計画への参加を望む必要があり、結果としての成果説明やそれなりの説得および多少の強制力も機能させなければならないと考える。当該授業の展開は、ほとんどが学外での中長期活動を主体として行なわれるために、平常時間割帯の中で実施することは不可能と考えられる。結果、どうしても休日または休暇中の正規授業時間外の枠を利用して実習活動を強制（必修）ではなく、任意（選択）で行なわせなければならない状況にある。学生達の任意な意思の下で、貴重な休みを返上してまでも履修したいと思わせることのできる妙異工夫のある新しい展開方法の案出と授業の中身を設定する事が先ず第一義的に考慮されるべきであると考える。しかし非常の二の次手段としては、結局受講者は何らかの強制がなければやはり受講しない傾向が強いだろう、と考える事から、特定資格取得希望者や特定コース所属者には、選択“必修”科目とするなどの履修枠設定を行なうなどの検討も必要であろうと思われる。その他の理由としては、“きつそう・単位が取り難くそう・座学の方が良い”や“面白くなさそう・楽しくなさそう”や“役に立ちそうではない”などの消極意見と伴に、“友人や周りが履修登録しなかったから”との連動行動意識を述べている者が多くいる事も今回の回答中で興味を引く。“みんなが取れば私も取ってみようかしら”の意識、反面“みんなが履修希望を止めるから（しないから）、私も止めたい（しない）”との意識があり、この“みんなが意識”の逆活用によるプラス効果雰囲気醸出も一考と考える。

2. 2 学科ごとの状況分析と授業改善に向けての考察

2. 2. 1 食物栄養学科について

- ① 食物栄養学科の学生による当該体験授業履修の状況は、開講当初から非常に良好（H19年度については、度重なる再オリエンテーションと指導の甲斐無く、最終的な受講者は1人）に推移している。本学科の主幹養成資格である栄養士専門職場を事前に見聞および疑似体験してみたい、との希望の意向を有する受講者もいるが、当該資格専門知識と技能・技術などがほとんど未修得なこの段階（1年次夏休み）での受け入れ先施設等に対する順当な派遣要請などがし難いとの理由で、アーリエクスポート相当の体験オプションは積極的には奨めていない状況がある。反面、栄養とは無関係な将来も含め未知の職場に関連する多彩な職場インターンシップで、プレ社会人として斬新な企業体験と人間としての在り方などを感得して帰ってくる学生が例年多くいる現状を体験レポートやパネル討論の結

果などから推察することができる。ただ、前節で総括したように、入学直後の履修オリエンテーション指導の一寸したニュアンスや周りの友人の履修動向など、本来の学習指針指導とは異なるメンタルな面に対するファクタが微妙に履修者増減に影響する傾向は結構大きいように感じている。改善策としては、やはり前節総括の中で提案されている「既体験者（2年次先輩生）によるオリエンテーションと勧誘」法を是非採用したいと考えている。この為には、当然前年の体験内容と結果が当該生にとって真に実りある有意義なものであるように教育指導する必要がある、勧誘内容の良し悪しは問わない、いわゆる“やらせ（演出）”は厳に慎みたい意向である。

- ② 次に、学外体験の実施期間の設定とその方法等に対する改善策について検討してみたい。当該授業の実施内容は学外での教育活動を主体にしている事を考慮すれば、平常時間割りの枠内で固定して展開する事は、ほぼ不可能に近いと思われ、どうしても休祭日（土・日）、特に夏（又は春）休み期間を利用するの自主的な活動色が濃くなる事は避けられないようである。この点に関しては、当の学生達の意向としては、夏期休暇中であろうとも、体験実習活動そのものに強い関心と興味を持ち、是非参加したいという強い意向を持っている者は特段休み中活動を忌避している訳ではない。要するに、当該活動様の授業に興味が無い者は、この“休み中、拒否”を非選択の理由にしているだけだと考える。故に、この忌避グループに属する学科所属の大部分の学生達に対して受講を可能とさせる為には、履修することのメリットを最大化させる何らかのプラス項目が付加される仕組みが必要である。

- ③ 当該科目新設当初から食物栄養学科の学生は受講者の中でも特に企業インターンシップ活動については、中心的な活動を行なってきた。開講第1期履修者（H16年度生）は、全国インターンシップ推進支援センター発行の“インターンシップ成果報告書—全国版—”冊子に民間企業でのインターンシップ体験の成果レポートを佐賀県代表として投稿し掲載された。また更に履修2～3期生についても、率先して夏季及び春季休業の期間を活用して企業インターンシップ体験に臨み、佐賀県インターンシップ推進支援センター主催の“企業インターンシップ成果報告会”に参加し、代表発表者として毎年多くの聴衆を前にその成果プレゼンテーションを行なっている。

また更に、本学のこのような活動実績を学外各所から評価された結果として、佐賀県経営者協会によって例年開催されている“企業インターンシップ推進研修会”においても、本学担当教員が講師として参加し支援活動を実施している。

④ 当該授業においては、企業インターンシップ及びアーリエクスポート体験以外にも学外体験学習内容としての選択オプションを複数設定している。その代表的なものとして、本学付属施設の健康福祉・生涯学習センターのエルダーカレッジ中高齢者の方々とのコラボレーション学外体験活動（黒髪山自然散策行・陶芸教室・長崎街道を歩く、など）がある。食物栄養学科学生が例年多く参加する人気体験オプションでは、“陶芸体験ツアー”がある。本学園のバスを貸し切り、中高齢者の方々と一緒に武雄市まで出掛け、一日陶芸教室で実際に土を捏ね、轆轤を廻し、世界に一つしかないオリジナルの花瓶や器などを創作する楽しみと共にエルダー生との異世代を越えた語らいなどが学生達の興味を捉えて放さないようである。その他に、特異なオプションとして“佐賀地方裁判所における傍聴体験と裁判官・検事・弁護士とのミーティング”という機会がある。これは、実際の裁判所刑事法廷における公判を直に見聴きするものであり、未成年学生にとっては授業体験という域を超えた強烈な体感学習となっているようである。本学科生で参加した者の中には、目の前で展開される社会の表裏の現実的精神的なショックを受けて耐えられなくなっている状況も散見される時があり、参加者の選定などに対しては今後若干の考慮が必要のようにも考えている。

⑤ 当該授業最後の総括学習的な要素を持つ全員参加の“あすなろう体験成果報告パネル討論会”には、毎年健康福祉・生涯学習センター／エルダー生の中高齢者の方々約30名にも協同参画して戴いている。履修各4学科からのパネラー成果発表（4名）に併せ、エルダー代表者からの総括パネラー意見を頂いた後、全員で活発な討論会を行なっている。報告担当学生へは、パワーポイント等のデジタル媒体制作指導と共に人前できちんと自分の意見を相手に伝える為のプレゼンテーション技術の付与とその能力向上の指導及び練習なども含め当該授業の重要な目的であると認識して行なっている。しかし学生個々の個人差はあるとしても、本学学生は一概に“発表べた（下手・苦手）”であるように見受けられる。その点での、以後の再教育手法の改善を検討する事も本授業の大きな使命であるとも考えている。この発表と討論会では、例年特に社会経験豊富なエルダー生の方々からは、辛口の学生達への叱咤激励の言葉と共に大変温かく且つ含蓄深い人生訓を基にした応援歌を頂戴している。学生達には、社会人となった後必ずや心に沁みる糧として記憶に残ることであろうと思っている。

⑥ 当該授業科目の成績評価と単位認定については、各学科指導担当教員が授業（学外体験実習含む）への出席とその活動状況及び各段階と最終レポート等の内容

を総合的に判断・評価し、科目担当教員（4学科輪番制で年度担当1人互選）が最終認定を行なっている。現在までのところ、幸いに不合格者は出ていない状況である。

2. 2. 2 生活福祉学科について

生活福祉学科においては、この科目を選択した学生は、新設年度である2004年度は8名、2005年度は2名、2006年度は3名、2007年度は9名であった。あすなろう体験の科目の目標は、学外における体験実習活動やグループ体験を通して、社会人としてのマナーやコミュニケーションの習得、また、陶芸の作品作りや自然・史跡の探訪などをすることにより豊かな心を養うことを目指している。

これらの体験実習の中で、企業インターンシップ体験は5日間40時間を学生に体験させているが、社会人としてのあり方やチームワークの重要性などを改めて感じさせ、学生に多くの刺激をもたらしており、貴重な体験となっているようだ。企業インターンシップの体験先については、学生の希望を優先して決めている。2004年は、佐賀経営者協会（1名）、佐賀新聞（2名）、佐賀県雇用支援機構（2名）、宇都宮病院（1名）、至誠会病院（1名）で体験し、2005年は、サガシキ印刷株式会社（1名）と福祉サービスこころ（1名）で、2006年は、宅老所たすけあい佐賀（2名）と福祉サービスこころ（1名）で体験している。

これまでの学生の体験先をみると、本学科は2年間の在籍期間中に主に夏休み・春休みに450時間（10週間）の介護実習があるため、福祉に関係のない企業を体験したいと希望する者や、就職を念頭に入れて施設の介護実習では体験できない小規模事業所で体験を希望する学生に分かれている。一般企業で体験した学生の感想をみると、挨拶、礼儀、言葉遣いなどビジネスマナーの大切さや難しさ、仕事の厳しさ、責任感の重要性など、社会人としてのあり方を実感するとともに、自分自身の挨拶の仕方、敬語の使い方、考え方の甘さなど、自分を振り返るよい機会になったことが実習記録やレポートからうかがえる。また、NPO法人などの福祉関連の小規模事業所で体験した学生は、「家庭的な雰囲気のなかで、利用者は明るくて快適な生活を過ごしておられ安心して生活されているように感じた。小規模なので利用者と密接に関わることができ、小規模施設の長所を勉強することができ、自分にプラスになる体験ができたと思う。あすなろう体験に参加して本当に良かった。」と施設実習と比べて感じた感想を述べている。

今年度入学の学生は、西海テレビ（1名）、佐賀経営者協会（2名）、佐賀銀行（1名）、どんぐり村（4名）、たすけあい佐賀（1名）で体験実習をした。佐賀経営者協会体験した学生は、「自分の視野を広げ幅広い目で

自分の将来について見つめることができるようにと考えこの科目を履修した。実際、自分の目でいろいろなことを体験し経営者協会と各企業のつながりなどを学ぶことができ数日間の体験で世界が広がったようだ、企業インターンシップを学生の時に一度は経験しておいたほうが良い。現場でしか感じ取れない緊張感や雰囲気など経験したことを生かして頑張りたい」と述べている。知的障害者通所授産施設の「どんぐり村」で体験した4名の学生は、動物の世話・クッキーやシュークリーム作り・パン作り・ホテル業務・除草作業など、障がい者と一緒に働けなかつた「共に生きるということ」やその他多くのことを学ぶことができた、また、障がい者の「障がいをもっていない人と同様に働きたい・自立したい」という思いや、思いを叶えてあげようとされている施設長や職員の支える思いなど、働く人たちの思いも知り、今後の介護の仕事に活かしたいと述べている。学生の体験実習記録に対し、どんぐり村の片渕施設長のコメントに『堅い壺は落とせば割れる、柔らかい豆腐も落とせば割れる、しかし、こしのあるコンニャクは落としても割れません。全て見たこと感じたことはあなたの「今の価値観」でしかないことを認識してください。大事なことは白紙で見る「純粋さ」とこしのあるコンニャクのような「バランス感覚」です。今後もいろいろな経験をこだわりのある視点でなく、フラットな視点で見るように心がけたら素晴らしい成長を遂げられると思います。期待しています。』と書かれていた。このような体験後の指導者からの助言（言葉）が、学生を更に大きく成長させるのではなかろうか。

あすなろう体験のメニューとして、企業インターンシップ体験だけでなく、エルダーカレッジの高齢者と一緒に行う陶芸や黒髪山登山、裁判所見学の体験を用意しているが、参加した学生は、自然とふれあったり、作品を完成させた喜びの他、黒髪山にしか生息していない花木の種類や名前について高齢者から教えてもらったり、いろいろな人々とのふれあいの中から多くのことを学んでいる。裁判所見学は衝撃的な体験だったようで、特に2年後には裁判員制度がスタートするので関心も深く考えさせられたと話していた。

あすなろう体験の授業は、学校では得られない、多くの貴重な体験ができ、社会に出る前の学生にとって有意義な授業といえると思う。

2. 2. 3 幼児保育学科について

幼児保育学科の受講者数の推移を見ると、平成16年度4名、17年度1名、18年度63名、19年度37名となっている。授業開始当初の2年間は我々教員側の期待とは裏腹に受講者数が少ない年が続いてしまった。それに比べ平成18年度以降では、受講者数が急増している。これは、

入学式直後に行われる学科別オリエンテーションにおいて＜あすなろう体験＞を受講した学生たちの体験談を紹介しつつ、学科を挙げて体験学習への取り組みを奨励していることが大きく影響しているものと考えられる。

過去4年間における幼児保育学科学生の職場体験先を分類すると、平成16年度は企業4名、17年度は幼稚園1名であった。また、受講者が急増した平成18年度は人数の多かった順に、保育園25名、企業23名、幼稚園4名、託児所3名、学童保育3名、図書館3名、児童館1名、高齢者のデイサービス1名となっており、翌19年度は保育園13名、託児所12名、企業8名、幼稚園2名、図書館1名、高齢者デイサービス1名であった。平成18年度と19年度には図書館で職場体験を行った学生たちがいた。彼らは一見、子どもと触れ合う機会がなかったかのように見受けられるが、実際には本の貸出しや整理等の司書業務を手伝いながら、図書館内で定期的に開催される“絵本の読み聞かせ会”の活動に参加しており、ここでも直接、子どもたちと係わる機会を得ていたことになる。

平成16年度以降の4年間における職場体験先を整理してみると、企業よりも幼稚園、保育所や託児所といった所謂、保育現場の方が圧倒的多数を占めていたことから、幼児保育学科学生の保育現場への関心の高さが窺える。

職場体験の目標について書かれた彼らの実習計画書の記述を見ると、企業での職場体験を希望した学生は、①ビジネスマナーを身につけたい、②プレ社会人として視野を広めたいという理由を挙げていた。一方、保育現場での職場体験を希望した学生は、①出来るだけ多く子どもと関わってみたい、②自分が通園した経験のない保育現場のことを知りたい（幼稚園卒の学生は保育園を、保育園卒の学生は幼稚園を、というように）、③今後、学外実習の受け入れを交渉したいと思っている保育現場なので、事前に繋がりを作っておきたい、といった理由を挙げていた。それぞれの学生たちは事前によく考えて目標を掲げており、職場体験に対する彼らの積極的姿勢が窺われる。

とはいえ、社会人としての経験がない学生たちにとって、職場体験は戸惑いも大きかったといえる。実習初日の実習記録には、「戸惑い」や「不安」「緊張」の文字が多く見受けられた。しかし、各職場の実習指導担当者のご指導、ご助言に支えられながら仕事に取り組むことによって、実習終了後に提出する報告書には、社会人としてのマナーを身につける必要性、仕事に対する責任感、職場での人間関係の重要性、社会性や協調性を身につける向上心を持って働くことの大切さ、子どもの発達に応じた対応、手遊びや幼児曲のレパートリー拡大の必要性等、多くのことに気づき、学び取ることができたという記述が見られるようになっている。職場体験は5日間という

短い期間ではあるが、学生たちにはとても貴重な学習の場となっているといえる。

本学エルダーカレッジ生と合同で行う陶芸教室では、エルダー生の熱心な取り組みに刺激され、学生の中には手び練りだけでなく、ロクロを回しての作品作りに取り組んだ学生もいた。陶芸は全員が初めての経験ということで、参加者の中には思い通りの作品に仕上がらなかったという学生もいたが、自分の手で作品を創り出す体験はとても新鮮だったという感想が聞かれた。

平成18年度の黒髪山散策は、台風の影響で止むを得ず中止せざるを得なかったが、平成19年度は7名が参加し、エルダー生との会話を楽しみながら、一緒に自然を満喫できたことを大変喜んでいて、若い学生たちにとっても豊かな自然の中で過ごす時間は、すがすがしい思いを味わえるひと時となったようである。

裁判傍聴は、平成18年度から行っている。参加者数は、平成18年度7名であったのに対し、翌19年度は25名に増えた。これは、幼児保育学科における＜共に学ぶあすなろう＞の授業の中で、民事裁判と刑事裁判の担当裁判官のお二人をお招きし、裁判員制度についての研修を実施したことが、裁判傍聴希望者数の増加に繋がった可能性がある。裁判傍聴後の学生たちの感想からは、人が人を裁くことの難しさを痛感していたことが窺えた。また、将来、自分も裁判員を依頼されたら、責任ある対応を求められることになるのだが、はたして自分に務まるのだろうかという不安の声も聞かれた。

＜あすなろう体験＞の授業の締めくくりとして開催されるエルダー生との合同パネル討論会では、毎年、エルダー生からの活発な意見や助言を得ている。どれもが長い人生経験に裏打ちされた示唆に富む内容であり、若い学生たちも大きく頷きながら耳を傾けている。夏期休業中に取り組んだ職場体験での経験があるからこそ、エルダー生からの声が、若い学生たちにも実感を伴いながら受け止められているのだと思われる。

以上のことから＜あすなろう体験＞の授業内容は、幼児保育学科の学生に貴重な体験と多くの気づきを齎していると考えられる。

2. 2. 4 くらし環境学科について

くらし環境学科は平成16年度に新設された。学科開設以来、環境教育の一貫として本学独自の「環境フォーラム」を年数回実施し、本学学生に加え他大学の学生や高校生・地域住民を対象に、地域社会に対する環境教育とその周知・理解、環境保全への意識啓発と普及に努めてきた。本フォーラムは初年度開講より、あすなろう体験科目の自然探訪オプションの一つに加えられた。あすなろう体験科目を履修するくらし環境学科学生は必然的に本フォーラム全回に参加した。

くらし環境学科学生のH19年度までの履修者数内訳は、次の通りである。平成16年度は企業探訪オプション（企業インターンシップ）と環境フォーラムに1年次生6名が参加、このうち1名は歴史探訪（長崎街道を歩く）に参加した。平成19年度は1年次生1名が、企業探訪オプション（企業インターンシップ）、自然探訪オプション（環境フォーラムと黒髪山散策）、人間探訪オプション（刑事裁判傍聴）に参加した。

先にも述べたように、本学くらし環境学科は新設からの歴史が浅く、学生の参加数は過去4年間に合わせて7名と、他学科の学生参加数に比べてはるかに少ない。このため本学科学生に対する、あすなろう体験科目の教育的効果に関する統計的な分析は困難である。そこで、学生によるあすなろう体験の個々の感想レポート「体験の記録」から学生体験を総評したい。

自然探訪オプションは、本学くらし環境学科の内容に重複する必然的なオプションであり、学生にとっては興味対象として当然の参加認識を持っている。このため、本学で実施されてきた環境フォーラムへの参加は、あすなろう体験を履修していない本学科学生と何ら意識の差を感じとることはないが、例えば「有明海を知る」（平成16年度実施環境フォーラム）や「黒髪山散策」（平成19年度実施）等の異世代間交流を含めた学外での体験は、自然探訪かつ人間探訪のオプションとして、自然環境への理解を深め、コミュニケーション能力や人間性、社会性を高める総合理解の場としてたいへん貴重な機会となっている。

体験の記録からは、学生は何よりも学外でのオプションに関心を比較的高く持っており、社会性に対する向上心や責任感や積極性が高まったことが判断される。あすなろう体験で最も学生が感心を抱いた体験は、共通して企業探訪オプション（企業インターンシップ）であった。本科学生特有の教育的効果は判断が難しいが、様々な角度から環境の専門知識を修得し、人間性を高め、社会で提案・実践できる人材の育成を目指す本科教育において、企業インターンシップでの体験は、本科教育に不足しがちな社会性や人間性への理解・向上に向けた人材育成上効果的なプログラムである。学生は共通してコミュニケーション能力や社交性（ビジネスマナーなど）の不足を企業体験から肌で感じとっていた。体験自体は、事務作業から軽作業と様々な内容のなか、普段にない作業や気配りなど戸惑いながらも体験し、アルバイトと社員の違い、業務に対する責任、仕事に対する誇りや積極的姿勢、将来の就職（活動）への意欲等、学内教育で得ることが難しい社会性・人間性の理解・向上心が個々の体験レポートから読みとられる。あすなろう体験は、学生の社会的知性の向上に寄与するものであり、社会に対して、自分の能力を認識し、対人関係能力や自己実現能力を高める

3. まとめ

今回の学生に対する学習嗜好調査及びその結果と当該体験型授業を担当してきた中での経験的思考などから、多くの学生達が一見すると何事にも自分から積極的に関わりを持つことに対して非常に消極的であるように映るが、何か興味を持つ切っ掛け（チャンス）さえあれば（或いは、与えれば）、異常な程の熱意で事に臨み、全うする能力を持っていることも再認識することができた。教育とは、ものを教える事だけではなく、誰でもの中に眠っているこのパッションに気付かせて自力で花を咲かせるチャンスを与えることかも知れないと思う。教員として授業を担当するに当たって、誰しも自分としては各種資料調査と関連する教育研究を積み重ね、熟考した上で効果的なカリキュラムとシラバスを構成し、その上に立脚した良質な教育を提供、実施していると考えているのが当然であろう。しかし、そこに一律な人格でない多様な思いや要望を持った一人1人の人格が異なった学生達が机を並べ私達教員と常に向き合っている事を考えると、個人の“思い込み”や“自己満足”に囚われて勝手に納得しているのではないかとの迷いの霧がなかなか晴れないのも事実ではないだろうか。当該授業を担当する私共各学科指導教員は、この身体をとおして（体験、体感）学ぶ“人間教育”を、未だ試行段階とも言えるこの新しい形態の“あすなろう体験”授業をモデルとしてじっくりと腰を落ち着けて考えて行きたいと思っている。佐賀短期大学の特色ある教育カラーとして、全学科が協調して展開する一般教育教養科目の中核としての発展と更なる成長に対して、今後共全教員の方々からの強力なご支援をお願いしたい。

新入生オリエンテーション資料（履修登録参考用）

新設『あすなろう体験』の授業概要

- ① 教科区分
「一般教育科目」
- ② 履修の対象学科
「全学科」
- ③ 履修内容
 - ・「任意選択」
 - ・「オプション履修制」：特化した学習内容ごとに、いくつかの小コース別カリキュラムを組み、受講者は複数オプションの中から任意に2～3分野を選択する。（オプションによっては、人数制限を設ける場合がある。）
- ④ 開講年次
「1年次」
- ⑤ 開講時期
 - ・前期（夏期休業日を含む）－後期（春期休業日を含む）の「通年科目」
 - ・主に学外における実習・研修・体験・見学・体験旅行などについては、夏休みや春休み期間中および土・日・祭日などを利用する。
- ⑥ 授業区分
「演習」
- ⑦ 単位
「2単位」
- ⑧ 個人ごとの教育指導体制
 - a. 各オプション・プログラムについてのコーディネートおよび調整・連絡事務などは、教務課が行なう。
 - b. 履修登録学生に対する個々の実習指導（体験学習のための事前と事後の指導および学習上の各種相談事へのマンツーマン指導は、各学科毎にそれぞれの学生を担当するチュータ教員が行なう。

(資料－２)

2007. 07

一般教育分野 教養科目「あすなろう体験」

授業アンケート（1年生用）

佐賀短期大学の“建学の精神”を基にした「あすなろう系の人間教育科目群」の中で、主に学外での体験学習を中心とした活動を行なう「あすなろう体験」の授業をさらに改善し、より魅力ある科目とするために

皆さん方からのご意見をうかがいたいと思います。

以下の各質問について、自分の考えに一番近いと思う選択肢に○印を付けてください。

〔Q-101〕 所属学科

- ①食物栄養
- ②生活福祉
- ③幼児保育
- ④くらし環境

〔Q-102〕 性別

- ①男性
- ②女性

〔Q-103〕 受講科目として履修登録するようにした理由は何ですか？（複数回答、可）

- ①履修オリエンテーションでの説明・薦め
- ②クラス担任の先生からの説明・薦め
- ③先輩からの薦め
- ④同輩（友達）の薦め
- ⑤シラバス（授業計画）の内容を見て
- ⑥体験型授業に興味があるから
- ⑦将来、役に立ちそうだから
- ⑧やりがいがありそうだから
- ⑨楽しそうだから
- ⑩面白そうだから
- ⑪単位を取るのが簡単そうだから
- ⑫夏休みや土日の期間を活用できるから
- ⑬友達が選択したから
- ⑭講義を受けるより体を動かす方が好きだから
- ⑮何となく

〔Q-104〕 この授業の中で、興味があるのはどれですか？（複数回答、可）

- ①一般企業でのインターンシップ体験（専門資格に特に関係のない職場体験）
- ②将来取得する専門資格（栄養士・介護福祉士・保育士・環境系）を活かせる職場体験
- ③学外でのいろいろな体験や活動（陶芸・山野自然散策・歴史探訪・裁判傍聴など）
- ④同輩やいろいろな分野の人々および中高齢者（エルダーカレッジ生）とのテーマ討論会
- ⑤中高齢者（エルダーカレッジ生）と一緒にの学習会
- ⑥地元の各種行事などへの参加
- ⑦くらし環境学科主催の環境フォーラムへの参加
- ⑧インターネット情報の収集調査活動

一般教育分野 教養科目「あすなろう体験」

授業アンケート（2年生用）

佐賀短期大学の“建学の精神”を基にした「あすな

ろう系の人間教育科目群」の中で、主に学外での体験学習を中心とした活動を行なう「あすなろう体験」の授業をさらに改善し、より魅力ある科目とするために皆さん方からのご意見をうかがいたいと思います。

以下の各質問について、自分の考えに一番近いと思う選択肢に○印を付けてください。

〔Q-201〕 所属学科

- ①食物栄養
- ②生活福祉
- ③幼児保育
- ④くらし環境

〔Q-202〕 性別

- ①男性
- ②女性

〔Q-203〕 受講科目として履修登録したのは、どのような理由でしたか？（複数回答、可）

- ①履修オリエンテーションでの説明・薦め
- ②クラス担任の先生からの説明・薦め
- ③先輩からの薦め
- ④同輩（友達）の薦め
- ⑤シラバス（授業計画）の内容を見て
- ⑥体験型授業に興味があるから
- ⑦将来、役に立ちそうだから
- ⑧やりがいがありそうだから
- ⑨楽しそうだから
- ⑩面白そうだから
- ⑪単位を取るのが簡単そうだから
- ⑫夏休みや土日の期間を活用できるから
- ⑬友達が選択したから
- ⑭講義を受けるより体を動かす方が好きだから
- ⑮何となく

〔Q-204〕 この授業の中で、興味があったのはどれですか？（複数回答、可）

- ①一般企業でのインターンシップ体験（専門資格に特に関係のない職場体験）
- ②将来取得する専門資格（栄養士・介護福祉士・保育士・環境系）を活かせる職場体験
- ③学外でのいろいろな体験や活動（陶芸・山野自然散策・歴史探訪・裁判傍聴など）
- ④同輩やいろいろな分野の人々および中高齢者（エルダーカレッジ生）とのテーマ討論会
- ⑤中高齢者（エルダーカレッジ生）と一緒にの学習会
- ⑥地元の各種行事などへの参加
- ⑦くらし環境学科主催の環境フォーラムへの参加
- ⑧インターネット情報の収集調査活動

〔Q-205〕 職場体験先を選んだ時のポイントは何ですか？（複数回答、可）

- ①学生の内に、将来の自分の専門資格に関係のない職場も見ておきたい
- ②早い時期に、将来の自分の専門資格に関係のある職場を見ておきたい
- ③現在目指している専門資格の職業が本当に自分に適しているかどうかを確認できること
- ④体験通勤に便利（近い、交通の便など）
- ⑤体験先の内容・状況などを知っている
- ⑥知人がいる職場
- ⑦その企業（施設等）の業種や活動などに興味がある
- ⑧楽な仕事
- ⑨体験時期や期間が適している
- ⑩体験できれば、どこでも何でも良い

[Q-206] この体験活動を通して主にどのようなことを感じましたか、又は考えましたか？
（複数回答、可）

- ①自己の反省
- ②社会人と学生
- ③就職（就労意識）
- ④対人・人間関係
- ⑤ルール（規則）
- ⑥責任感
- ⑦短大での勉強
- ⑧挨拶（礼儀作法）
- ⑨自分
- ⑩他人
- ⑪親
- ⑫文章力・読解力
- ⑬コミュニケーション
- ⑭人はそれぞれ考えや立場が違う
（自他意識の確認）
- ⑮効率や成果
- ⑯能力
- ⑰職業の適正
- ⑱将来計画
- ⑲地域社会
- ⑳経済観念（おかね）

[Q-207] この体験を通して、自分はどのように変化したと思いますか？（複数回答、可）

- ①社会が良く分かるようになった
- ②社会が分からなくなった
- ③精神的に成長した
- ④自分の良い点が分かった
- ⑤自分の悪い点が分かった
- ⑥楽観的（気が楽に）になった
- ⑦悲観的（気が重く）になった
- ⑧他人を認めることができるようになった

- ⑨他人のことが分からなくなった
- ⑩勉強することの大切さが分かってきた
- ⑪勉強の必要性が分からなくなった
- ⑫働きたくなった
- ⑬働きたくなくなった
- ⑭人間の良さ（性善）が分かった
- ⑮人間の悪さ（性悪）が分かった
- ⑯現在の専門資格に興味をわいた
- ⑰現在の専門資格に疑問をわいた
- ⑱優しくなれるようになった
- ⑲物事に厳しくなった
- ⑳その他（ ）

[Q-208] この授業を受講して良かった（満足度）
と思いますか？（授業に対する評価）

- ①非常に満足
- ②ほぼ満足
- ③どちらでもない
- ④やや不満
- ⑤かなり不満

[Q-209] この授業の受講に対してあなた自身は
どのように臨みましたか？（自己評価）

- ①かなり真剣に臨んだ
- ②ほぼ真剣に臨んだ
- ③どちらでもない
- ④やや真剣さに欠けた
- ⑤真剣さに欠けた

一般教育分野 教養科目 「あすなろう体験」 授業アンケート（全学生用）

佐賀短期大学の“建学の精神”を基にした「あすなろう系の人間教育科目群」の中で、主に学外での体験学習を中心とした活動を行なう「あすなろう体験」の授業をさらに改善し、より魅力ある科目とするために皆さん方からのご意見をうかがいたと思います。

以下の各質問について、自分の考えに一番近いと思う選択肢に○印を付けてください。

[Q-001] 所属学科

- ①食物栄養
- ②生活福祉
- ③幼児保育
- ④くらし環境

[Q-002] 学年

- ①1年生
- ②2年生

[Q-003] 性別

- ①男性
- ②女性

[Q-004]「あすなろう体験」を履修科目として選択しなかった理由を教えてください。

(複数回答、可)

- ①他に受講したい科目があったから
- ②体験型授業に興味が無いから
- ③学習がきつそうだから
- ④単位を取るのが難しそうだから
- ⑤どのような授業なのか良く分からないから
- ⑥あまり役に立ちそうでないから
- ⑦面白そうでないから
- ⑧楽しそうでないから
- ⑨学校が休み(土・日や夏休み)の期間中に出てきて体験活動するのがいやだから
- ⑩学外活動より教室での学習の方が良いから
- ⑪友達が選択しなかったから
- ⑫履修登録する人が少なかったから
- ⑬何となく